

兄弟の妻を娶ること

——聖書とその周辺に見る諸相——

赤井伸之

目次

- 一、はじめに
- 二、レヴィ・レイト婚をめぐる
- 三、ハリツァーをめぐる
- 四、結びに代えて

一、はじめに

新約聖書とりわけマタイによる福音書とマルコによる福音書は、バプテスマのヨハネ^①の死に関連して、それに先立つ逮捕の原因を、ヨハネが領主ヘロデ^②の結婚をめぐる^③、「自分の兄弟の妻と結婚することは、律法で許されていない」と言ったことにあると伝えている。

ヨハネの念頭にあり言及した「律法」とは、「兄弟の妻を犯してはならない。兄弟を辱めることになるからである」

(レビ一八・一六)あるいは「兄弟の妻をめとる者は、汚らわしいことをし、兄弟を辱めたのであり、男も女も子に恵まれることはない」(レビ二〇・二二)のことであると一般に考えられている⁴⁾。

この「律法」の規定の趣旨からは、兄弟が生きている間は、たとえ離婚した場合であつても結婚は禁じられたようであるし、兄弟が死亡した場合でも子供がいるならば結婚が認められず、それを敢えて実行すれば、不妊という神の審きが伴うと考えられた。それゆえ、領主ヘロデ・アンティパスのケースは、異母兄弟ヘロデ・フィリポは、離婚していても生きており、しかも前婚ではヘロデヤにはサロメという子がおり、さらにヘロデ・アンティパスは、前妻を正当な理由なしに追い出して離婚を強行したことなど、どう考えても許される結婚ではなかった。

ところが、この「律法」は故人に子供がいなかった場合には、適用を除外された。すなわち、ある人が子供を残さずに死亡した場合には、その兄弟は寡婦となった義理の姉妹と結婚できるし、結婚することが要請された(申命記二五・五)。これが本稿で考察していこうとするいわゆるレヴィート婚である。

(1) バプテスマのヨハネは、聖書の中ではキリストの先駆者とみなされており(イザヤ四〇・三、マラキ三・一)、アビヤ組の老祭司ザカリヤを父、アロン家の娘エリサベトを母として前五年頃生まれた。エリサベトとマリアとは親類なので(ルカ一・三六)、ヨハネとイエスは親戚関係にあるとみなされているが、正確なところは不明である。

ヨハネは、皇帝ティベリウスの治世の第一年(ルカ三・一)、ユダヤの荒野またヨルダン川沿いの地方一帯で宣教活動を始めた。その内容は、メシア王国の到来の接近と悔い改めによる準備の必要なことであり、悔い改めのしるしとして、バプテスマを施していた。イエスもヨルダン川で彼からバプテスマを受けた(マタイ三・一三〜一七、マルコ一・九〜一一、ルカ三・二一〜二二)。

ヨハネは、旧約預言者の最後の人物と数えられ、イエスによって称賛されている（マタイ一・一一、一三）。ヨハネは、領主ヘロデ・アンティパスに対して、その結婚の不道徳を責め、その為に捕らえられて死海の東岸マケルスの城塞に幽閉され、のち斬首された（マタイ一四・三〜一二、マルコ六・一四〜二九、ルカ九・七〜九）。

以上、馬場嘉市編『新聖書大辞典』キリスト新聞社、一九七一年、一四五一頁〜一四五三頁。

荒井献他編『旧約／新約 聖書大辞典』教文館、一九八九年、一二五二頁〜一二五三頁。

Schürer, E., *The history of the Jewish people in the age of Jesus Christ*, 1973, vol. I, pp. 345〜8等参照。

(2)

ここに領主ヘロデと出てくるのは、ヘロデ大王とサマリア人の妻マルタケによる次男で、アルケラオスの実弟ヘロデ・アンティパスのことで、前二〇年頃生まれた。父の死後、ガラヤとペレアの領主となった。

彼の最初の妻はナバテアの王アレタ四世の娘だった。しかしその後（二八年）彼がローマを訪れた時、ヘロデ大王とマリアンメ（ヒルカヌス二世の孫娘）の息子アリストブロスの娘ヘロディアと出会った。彼女はその時ヘロデ大王とシモンの孫娘マリアンメの息子ヘロデ・フィリポの妻であった。彼らにはサロメという娘がいた。

ヘロデ・アンティパスとヘロディアとは恋に陥り、それぞれの配偶者と離婚することにした。ヘロディアの夫（ポエトス）には異存がなかったが、アンティパスの妻は父アレタ四世のもとへ逃げ帰った。

かくてヘロデ・アンティパスとヘロディアは再婚した。この結婚は、ユダヤ人の間で大きなスキャンダルを引き起こしたのみならず、アレタ王の復讐心に燃えた怒りを招いた。そして三六年にナバテヤ王アレタ四世の攻撃を受け、ヘロデ・アンティパスは敗北を喫した。彼はローマに対し援軍の派遣を求めたが、皇帝ティベリウスの死に伴い、援助は成功しなかった。やがて国主ピリポが死ぬと、ローマ皇帝カリグラはピリポの領地を同じヘロデ家のアグリッパに与え、同時に王の称号をも与えた。

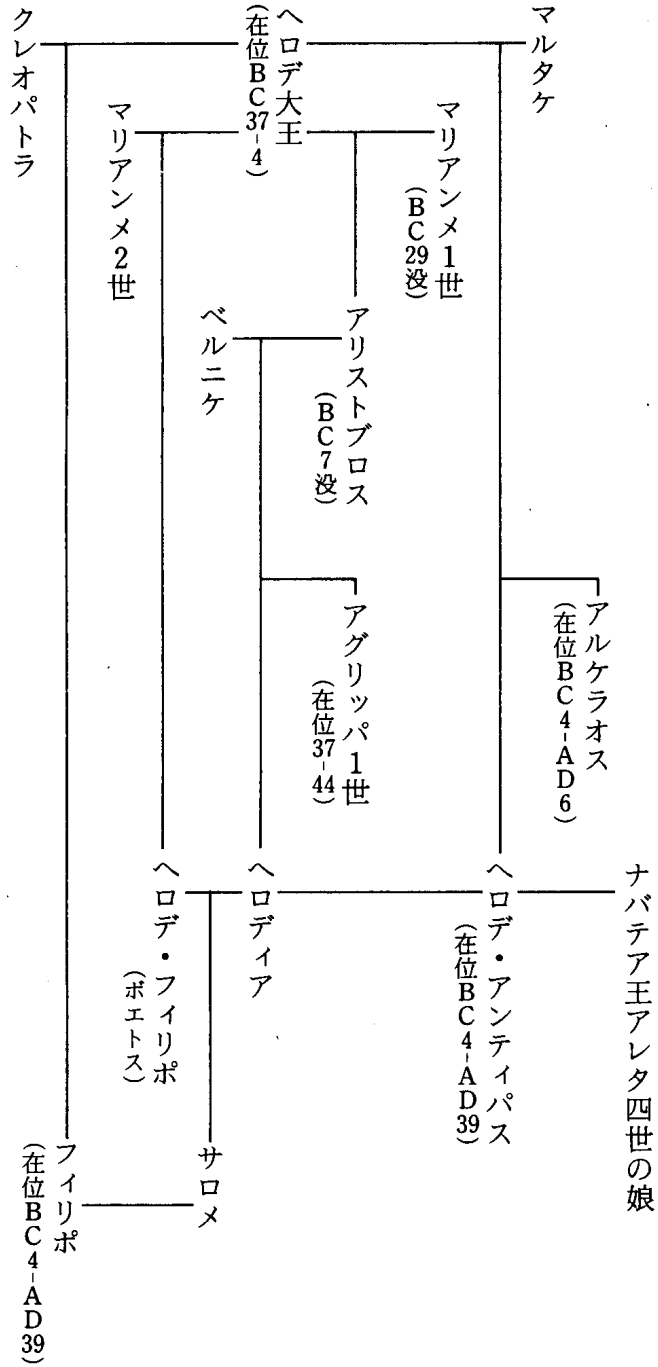
このヘロディアの兄弟アグリッパ一世の予想外の出世をうらやんだ彼女は、夫をローマに送り、皇帝ガイウス・カリグラの許へ出向いて王の称号を要求させると共に、自分も女王になることを願ったが、逆にアグリッパから謀反のかどで訴えられ、領地・財産を没収されてガリアに追放され、流刑地で死亡した（三九年頃。なお一説には処刑されたとも言う）。

以上、『新聖書大辞典』一二四六頁。

『旧約／新約 聖書大辞典』一〇七九頁～一〇八〇頁。

Schürer, op. cit. I, 287～329.

E. M. Smallwood, *The Jews under Roman Rule*, pp. 183～187.



ヘロデ大王は10人の女を妻としたと言われているが、その関係は大変複雑であり、ここには本稿に関係すると思われるごく一部の人物のみを図示した。

なお、この系図作成に当たり、『旧約／新約 聖書大辞典』1078頁の「ヘロデ家系図」『The Oxford Bible Reader's Dictionary & Concordance』p. 150 "Family of the Herods" 等を参照した。

(3)

これは聖書(マタイ一四・四、マルコ六・一八)が伝えている原因であるが、一方ヨセフスは次のような記事を伝えている。「しかし、ヘローデースの軍隊の敗北は、ユダヤ人の中の「心ある」人びとにとっては、神の意志にもとづく復讐であるように思われた。事実、それは洗礼者と呼ばれたヨアンネースになされたしわざにたいする正義の復讐だった。ヘローデース「こそ」は、ヨアンネース殺害の犯人だった。

「人間としての」ヨアンネースは「根からの」善人であって、ユダヤ人たちに、徳を実行して互に正義をもとめ、神にたいしては敬虔を実践して、洗礼に加わるように教えすすめていた。

ヨアンネースによれば、洗礼は、犯した罪の赦しを得るためでなく、「霊」魂が正しい行いによつてすでにきよめられていることを神に示す、身体のかよめとして必要だったのである。

さて、その他「の人びと」も「ヨアンネースの」説教を聞いて大いに動かされ、「その周囲に」群がった。そこでヘローデースは、人びとにたいする彼のこの大きな影響力が何らかの騒乱をひきおこすのではないかと警戒した。事実、人びとはヨアンネースがすすめることなら何でもする気になっていたように思われた。そこでヘローデースは、実際に革命がおきて窮地におちいり、そのときになってほぞをかむよりは、反乱に先手をうって彼を殺害しておくほうが上策であると考えた。

ついにヨアンネースは、ヘローデースのこの疑惑のため、前述した要塞のマカイルスへ鎖につながれて送られ、そこで処刑された。そしてユダヤ人たちは、ヘローデースの軍隊が「ここで」敗北したのはヨアンネースの復讐によるものと考えた。神がヘローデースを罰することを欲したもうたからというわけである。(ヨセフス『ユダヤ古代誌』一八・五・一一六～一一八、秦剛平訳による)

このように述べて、ヘロデ・アンティパスの軍隊が、ナバテヤ王アレタ四世に敗れた原因を、ヘロデ・アンティパスの離婚問題に端を発したアレタ王の怒りの結果であったというよりは、善人ヨハネが人々に身体のかよめによつて象徴される悔い改めと正しい行いの実践をすすめて、大衆の間に人気のあるヨハネの影響力が政治の領域に及ぶのを危惧し、ヨハネを自分の統治の敵対者であるとして、マケルスの要塞で彼を処刑したことに対する正義の復讐であったとし、これはユダヤの人々が抱いていた見解でもあるというのである。

ヨハネが旧約の律法に違反したヘロデ・アンティパスをとがめたことが、その処刑された原因であったとする聖書の見解はヨセフスには見出せない。

(4) 聖書の引用は特にことわりのない限り、日本聖書協会の『新共同訳』による。

二、レヴィレイト婚をめぐつて

一

レヴィレイト (levirate) という言葉は「夫の兄弟」あるいは「義兄弟」を意味するラテン語 (levir) から来ている⁽¹⁾。レヴィレイト婚とは、夫婦の間に子がないまま夫が死亡した場合、夫の兄弟が寡婦と交わり、その結果生まれた子供を故人の法的な子とする慣行をいい、聖書等においては、この語を申命記に見える婚姻の形態に適用すると共に、必ずしも全ての点で申命記法に一致しなくとも類似の婚姻形態にも適用している⁽²⁾。

申命記は次のようにレヴィレイト婚を規定している⁽³⁾。

兄弟が共に暮らしていて、そのうちの一人が子供を残さずに死んだならば、死んだ者の妻は家族以外の他の者に嫁いではならない。亡夫の兄弟が彼女のところに入り、めとつて妻として、兄弟の義務を果たし、彼女の産んだ長子に死んだ兄弟の名を継がせ、その名がイスラエルの中から絶えないようにしなければならない。

すなわち、夫が先に死亡して、夫婦の間に子供がなくて妻が残された場合、死亡した夫の兄弟は、その寡婦を娶つて、兄弟の子孫を残さなければならない、という特殊な慣習をいい、その目的とするところはイスラエル女性の部外者への結婚を妨げ、かつイスラエルにおいて、死亡した夫の名を継続させることであつた。

こうしたレヴィレイト婚は、単にイスラエルにのみ固有のものではなく、子細に検討すればイスラエルのそれとは異なるものの、アッシリア法書やヒツタイト法にも見えることは先学の指摘するところである⁽⁴⁾。

- (1) 例えば、*The Oxford English Dictionary*, 2nd ed. VIII, p.870. のラテン語 *levir* に対応するヘブライ語は、*[yavam]* である。なお、その他の関連語については、Philip Blackman, *Mishnayoth*, vol. 3, Order Nashim, Judaica Press, 1983. ©p. 182 挙げられている。

- (2) 聖書の中でレヴィレイト婚の例として挙げられるのは、創世記三十八章の記事とルツ記のそれであるが、ルツ記のケースは、本来なら寡婦ナオミが実行すべきであったのにボアズがルツと結ばれたのは「贖う者」*[go'el]* の制度と関係があると考えられている。

この「贖う者」とは、古代イスラエルにおける家族法概念の一つであり、近親者の借金のかたを取り返したり、あるいはもしその者が奴隷となっていたなら、彼の自由を買い戻すことが「贖う者」に要請されていた。

それらの例として、レビ二五・二五「もし同胞の一人が貧しくなったため、自分の所有地の一部を売ったならば、それを買い戻す義務を負う親戚が来て、売った土地を買い戻さねばならない。」やレビ二五・四七〜四九「もしあなたのもとに住む、寄留者、滞在者が豊かになり、あなたの同胞が貧しくなって、あなたのもとに住む寄留者ないしはその家族の者に身売りしたときは、身売りをした後でも、その人は買い戻しの権利を保有する。その人の兄弟はだれでもその人を買戻すことができる。おじとかいとも買い戻すことができる。その人の一族の血縁の者も買い戻すことができる。その人が自分でその力を持つようになったときには、自分自身を買戻すことができる。」などがある。

ところで、ルツ記の場合、この「贖う者」*[go'el]* の制度とレヴィレイト婚とが結合していると言われている。すなわち、親族の者が財産を手放すというので、最近親の者にまず買い戻す権利が与えられ、その者は一度受諾の回答をしたものの、さらにこの買い戻し権にはルツと結婚しなければならないという義務まで付随していることが判明した段階で、すべての権利を放棄して、結局ボアズが土地を買い戻し、ルツと結婚することになった(ルツ四・一〜一〇)。なお、最近の柏井宣夫『旧約聖書における創造と救い』日本基督教団出版局、一九九〇年、一六九頁〜一七二頁は、この点について細かく分析している。

(4) 原田慶吉『楔形文字法の研究』清水弘文堂、二〇九頁以下参照。イスラエルのそれには義務が伴うが、古代オリエント法のそれには義務を暗示させるものはないという。

なお、レヴィレート婚についての日本語での主な文献は以下の通り。

穂積重遠「旧約全書に現はれた婚姻」法学協会五十周年記念論文集第二部所収。

田辺繁子「旧約全書に観る女性の地位」同志社論叢五六・五七号所収。

星野三雄「聖書に現われたLevirate Marriageについて」桜美林大学紀要・英米文学篇第一二輯所収。

その他、本稿作成にあたり、必ずしもすべて注等で引用したとは限らないが、参照した文献は以下の通り。

Baab, O. J., 'Levirate Marriage' in the art. of 'Marriage', in *The Interpreter's Dictionary of the Bible*, vol. 3, pp. 282
~283.

Burrows, M., "Levirate Marriage in Israel", in *JBL* 58(1940), pp. 23~33.

Cohn, M., "Leviratehe", in *Judisches Lexicon*, 2 Aufl. 1987, Bd. 3, ss. 1076~1078.

Elon, M., "Levirate Marriage and Halizah", in *The Encyclopaedia Judaica*, vol. 11, pp. 122~129.

Epstein, L. M., *Marriage Laws in the Bible and the Talmud*, 1942, pp. 77~144.

Falk, *Introduction to Jewish Law of the second commonwealth*, Leiden, 1978, part 2, pp. 317~322.

Greenstone, J. H., "Halizah", in *The Jewish Encyclopedia*, vol. VI, pp. 170~174.

Jacobs, J., "Levirate Marriage", in *The Jewish Encyclopedia*, vol. VIII, pp. 45~46.

Kutsch, [ybm] in Botterweck, G. J. and Ringgren, H., ed. (Green, D. F. trans.) *Theological Dictionary of the Old Testament*, vol. V, Erdmans, 1986, pp. 367~373.

Rabinowitz, L. I., "The Ceremony of Halizah", in *The Encyclopaedia Judaica*, vol. 11, p. 130.

Safrai, S. and Stern, M. ed., *The Jewish People in the First Century*, vol. 2, pp. 787~791.

Wigoder, G. ed., "Levirate Marriage", in *The Encyclopedia of Judaism*, Macmillan, 1989, pp. 434~435.

さて、レヴィレート婚を規定している申命記法について、内容を検討していきたい。^①

冒頭の「兄弟が共に暮らしていて」（申二五・五）の文言は、文字通りには兄弟たちが一緒に住んでいる状況を示しているが、申命記法が前提している共同体の基本的枠組みは、王国成立以前の大家族を単位とする部族制的居住共同体ではなく、町の門に象徴される地域共同体であった。それゆえ、「共に」とは同じ町の住人であることを前提としており、そのように考えることにより「くつを脱がされた者の家」（申二五・一〇）という輕蔑的意味を含んだ表現も意味をなすことになる^②としている。

次に「そのうちの一人が子供を残さずに死んだならば」（申二五・五）とあるが、まず、「そのうちの一人」とあるので、兄弟のうちの一方が死亡した、しかも「子供を残さずに」死亡した、というのがレヴィレート婚の前提となっている。

ところで「子供」と訳されたヘブライ語は「ben」で、それは①息子、男の子、②子供、子孫、の意味を持っている。そこで「ben」を「息子」とのみ解して、かつては「死亡した兄弟に息子がいない場合には、たとえ娘がいたとしても、レヴィレート婚が履行される」と考えられたが、^③「ben」を性別を問わない「子供」と解することは、創世記三章一六節からも明らかであるし、^④古くはいわゆるセプチュアジンタ（七十人訳）と呼ばれる旧約聖書のギリシア語訳、またウルガタと呼ばれるラテン語訳、ヨセフスの「ユダヤ古代誌」^⑤、さらには新約聖書の共観福音書でも見られた。^⑥

それゆえ、この考えに従えば、「死亡した兄弟に息子にしろ娘にしろ、ともかく跡継ぎとなるべき子供がいない場合にのみレヴィレート婚が履行される」と解するのである。^⑦

娘が跡継ぎとなりうることについては、民数記二七章一―一節が伝えているツエロフハドの娘の場合の例からも明らかであり、死亡した者に娘しかない場合でも、その娘が相続人となり、レヴィレト婚の問題は生じないと考えられた。⁽⁸⁾

しかるに、レヴィレト婚の目的は、前述した如く、「名」の継承・存続であった。そのことは「彼女の産んだ長子に死んだ兄弟の名を継がせ、その名がイスラエルの中から絶えないようにしなければならない。」(申二五・六)という文言とか、「わたしの義理の兄弟は、その兄弟の名をイスラエルの中に残すのを拒んで、わたしのために兄弟の義務を果たそうとしません。」(申二五・七)と町の門のところにいる長老に訴える口上の中でもそのことに触れている。

ところで、「名」とは名前そのものでないことは、創世記三八章やルツ記の記事からも明らかである。⁽⁹⁾

では、「名」が名前そのものを意味しないとすれば、いったい何を意味していたのであろうか。それは「死んだ者の妻は家族以外の他の者に嫁いではならない。」(申二五・五)という規定の意味するところと関連していた。すなわち、レヴィレト婚の目的は通例二つあったとされている。一つは、故人の家系を絶やさず、子孫をもうけること。もう一つは、家産を家族内に留め、その散逸を防ぐこと。このように「名」には家系の維持のみならず、相続権が結び付いていたことについて、鈴木氏は、氏族共同体から土地所有権の分割を防ぐという伝統的な前提と無関係ではないだろうと指摘している。⁽¹⁰⁾

この点については、ヨセフスも「夫が死亡して妻に子供がない場合は、夫の兄弟が彼女と結婚しなければならない。そして、生まれた子供に故人の名をのらせ、遺産の相続人として育てなければならない。このことは社会全体にとっても有利な措置と言える。なぜなら「そのために」家は断絶をまぬかれ、財産は近親者たちに残り、前夫に最も近

い縁者とともに生活することによって妻の不幸も緩和されるからである。」ⁱⁱと述べて、レヴィイレート婚の意義を強調している。

(1) 以下の考察は、鈴木佳秀著『申命記の文献学的研究』日本キリスト教団出版局、一九八七年、四一九頁以下に主として依拠している。

(2) 鈴木前掲書四二〇頁。

(3) Falk, op. cit., p. 319. 参照。

(4) 創世記三・一六には、「お前は、苦しんで子を産む。」とある。この、子とある語 [banim] は [ben] の複数形である。

(5) ヨセフス『ユダヤ古代誌』四・八・二三参照。

(6) マタイによる福音書二二・二四、マルコによる福音書二二・一九、ルカによる福音書二〇・二八などを参照。

(7) Babilonia Talmud of B. B. 109aは、レヴィイレート婚の前提条件として「まったく子供がいないこと」と解していた。逆に、その人にどんな形——私生児、改宗者、背教者——であれ、子供がいるならば、その子は死亡した父親の妻をレヴィイレート婚から免除した。ただし、奴隷から生まれた子と異邦人から生まれた子は、そのようなことから除外された(Mishnah, Yev. 2:5)。

(8) 民数記二七・一―一一には次のような興味ある記事がある。

ヨセフの子マナセの一族であるヘフェルの子ツエロフハドの娘たちが進み出た。娘たちの名はマフラ、ノア、ホグラ、ミルカ、ティルツアといい、その祖父ヘフェルはギレアドの子、ギレアドはマキルの子、マキルはマナセの子であった。娘たちは、臨在の幕屋の入り口にいるモーセと祭司エルアザル、指導者および共同体全体の前に立って言った。

「わたしたちの父は荒れ野で死にましたが、主に逆らって集まった仲間、あのコラの仲間には加わりませんでした。彼は自

分の罪のゆえに死に、男の子はありませんでした。男の子がないからといって、どうして父の名がその氏族の中から削られてよいでしょうか。父の兄弟たちと同じように、わたしたちにも所有地をください。」

モーセが娘たちの訴えを主の御前に持ち出すと、主はモーセに言われた。

「ツエロフハドの娘たちの言い分は正しい。あなたは、必ず娘たちに、その父の兄弟たちと同じように、嗣業としての所有地を与えねばならない。娘たちにその父の嗣業の土地を渡しなさい。」

あなたはイスラエルの人々にこう告げなさい。ある人が死に、男の子がないならば、その嗣業の土地を娘に渡しなさい。もし、娘もいない場合には、嗣業の土地をその人の兄弟に与えなさい。もし、兄弟もない場合には、嗣業の土地をその人の父の兄弟に与えなさい。父の兄弟もない場合には、嗣業の土地を氏族の中で最も近い親族に与えて、それを継がせなさい。主がモーセに命じられたとおり、イスラエルの人々はこれを法の定めとしなさい。」

(9) なお、このツエロフハドの娘たちの相続をめぐる問題については、別の機会に取り上げて考察してみたいと考えている。すなわち、まず創世記三八章では、ユダの長男エルに迎えた嫁のタマルをめぐる、エルの死後オナンが、さらにはシエラが兄弟の義務を果たすべきであったのに、結局はタマルの奸計でユダによって子をもうけたが、生まれた双子の一人にペレツ、もう一人にゼラという名が付けられたという。(いずれも、本来付けられるはずのエルではなかった！)

一方、ルツ記では、エリメレクとその妻ナオミは二人の息子マフロンとキルヨンを連れてモアブの野に住み、エリメレクの死後息子たちはモアブ人の女オルパとルツをそれぞれ妻とし、十年後に息子たちは死亡してしまった。夫と二人の息子に先立たれたナオミは故国ユダに帰ることにしたが、ルツだけはナオミに同行する固い決意を示した。かくして、モアブの女ルツはエリメレクの一族のボアズの妻となり、オベドという名の男の子を生んだ。(ルツの夫の名はマフロンだったのに！)

(10) 鈴木前掲書四二二頁。

(11) ヨセフス『ユダヤ古代誌』四・八・二三、秦剛平訳による。

さて、「亡夫の兄弟が彼女のところに入り」（申二五・五）とあるだけで、それ以上詳しいことが聖書には何も書いていないものの、聖書の規定を細かく注解したとされるミシュナや、さらにそのミシュナを注解したとされるタルムードを見ていくと、なお一層詳細に事実関係がはつきりしてくる。^①

まず、亡夫にどんな形であれ、兄弟がいるならば、その兄弟はレヴィレート婚の義務を負った。^②

次に、「亡夫の兄弟」で生存者が二名もしくはそれ以上いた場合には、彼女を娶るレヴィレート婚の義務の履行は、生存兄弟の中の最年長者に委ねられ、その者が義務を履行しない場合には、他のすべての生存兄弟たちに順に履行についての打診がなされ、そのうちの一人によって履行されることも有効であった。しかし、もし全員が拒否したならば、再び最年長者に履行の打診が及んできた。^④

前述したように、レヴィレート婚の義務は、死亡した兄弟の寡婦のみならず、彼の他の妻との間にも子が一人もない場合に、亡夫の兄弟によって履行された。このように兄弟が複数の妻を持っていた場合には、生存兄弟の一人は、寡婦の誰か一人とレヴィレート婚（もしくは後述のハリツァー）を行ない、他の寡婦については免除された。^⑤

寡婦 [yevamah] と義兄弟 [yavam] の関係 [zikkah]^⑥ は、夫の死によって発生したが、寡婦は義兄弟を待つ者 [ahomeret yabam] として知られた。^⑦ なお、彼女の夫の死後三ヶ月経過することが「彼女のところに入る」ための条件であった。^⑧

かくして、レヴィレート婚の履行によって寡婦と結婚する義兄弟が彼の死亡した兄弟の財産を継承した。^⑨

- (1) シシユナやタルムードでは、第三編NASHIMの第一章YEYAMOTがこれに該当する。
シシユナについては、Danby, *The Mishnah*, Oxford, 1933.; Blackman, P., *Mishnayoth*, 1983.; Newsner, *The Mishnah* A New Translation, Yale, 1988.
タルムードについては、Epstein, I. ed., *The Soncino Talmud*, Nashim I, Yebamoth.; Epstein, I. ed., *Hebrew-English Edition of the Babylonian Talmud*, Seder Nashim, Yebamoth, 1984.
なお、パレスチナ・タルムードについては、Newsner, J. tr., *The Talmud of the Land of Israel*, vol. 21, Yebamot, Chicago, 1987.があるが、詳しく検討することは出来なかった。
- (2) ただし、その兄弟でも、母が奴隷の場合と異邦人の場合には除外された。Mishnah, Yev. 2: 5.
- (3) この場合の義務とは、レヴィイレート婚を履行する義務のみならず、後述のハリツァーの儀式をすることすら含まれていた (Philip Blackman, op. cit. p. 46)。
- (4) Mishnah, Yev. 2: 8, Yev. 4: 5; Babilonia Talmud, Yev. 24a, Yev. 39a.
Epstein, L. M., op. cit., p. 121. かくして、レヴィイレート婚を履行する一人の兄弟だけが、故人の財産を相続する権利を有し、他の兄弟にはその権利は認められないという (Babilonia Talmud, Yev. 24a)。
- (5) Epstein, L. M., op. cit., p. 121. Mishnah, Yev. 4: 11. の場合、もし寡婦の一方が適格で、他方が不適格であるならば、ハリツァーをするのであれば不適格の寡婦と行い、レヴィイレート婚を履行するのであれば、適格の寡婦と行うべきであるとされている。
- (6) [zikkah]は一般には「係わり、関係、絆。帰属」といった意味を持つ語であるが、『現代ヘブライ語辞典』キリスト聖書塾、一九八四(一四一頁)、タルムードにおいては特別の意味を持っていた。すなわち、子のない寡婦とその義兄弟とのレヴィイレート婚を前提とした相互依存的な関係を意味した。この二人の関係は真実な・現実的な関係であり、これによって近親相姦を禁止する法(レビ一八・一六、二〇・二一)に抵触することもなくなるし、また彼女の誓願を夫だけが妨害出来る権利(民数三〇・二一・二七)を義兄弟も将来的に持つという法的な結果を生じることになった。もともと、レヴィイレート婚を前提と

したこの関係においては、レヴィレート婚が具体的・実際に履行されるまでは夫婦関係がなかったことは言うまでもない
(Marcus Jastrow, *Dictionary of the Targumim, Talmud Babil, Yerushalmi and Midrashic Literature*, Judaica Press, 1985, p. 396)。その他 Epstein, L. M., op. cit., pp. 104~115.

(7) *Encyclopedia Judaica*, vol. 11, p. 124.

(8) しかるに、この期間は、生まれてくるかも知れない子の父親確定のためにも必要な一種の待婚期間であったとされている。
Mishnah, Yev. 4 : 10. Epstein, L. M., op. cit., p. 119. なお、*The Jewish Encyclopedia*, vol. VI, p. 171. では、三ヶ月経過を正確に九日以上経過としている。

(9) Mishnah, Yev. 4 : 7 ; Babilonia Talmud, Yev. 40a. なお、*Encyclopaedia Judaica*, Vol. 11, p. 124. によれば、遺産の継承に関して、二つの対立する説があった。多数・通説は本文に示した通りであるが、有力な少数・反対説(ラビ・ユダ)によれば、父が生きているならば、息子の遺産は父が相続し、父がいなければ兄弟たちでその財産を承継し、従って寡婦と結婚する義兄弟でも、兄弟で分割した割り当て分だけを相続したという。(The Soncino Chumash, p. 1113によれば、ラシの註解も、義兄弟がレヴィレート婚によつて得るのは分割分のみであったという。)しかるに筆者は、義兄弟は死亡した兄弟の遺産を承継したという通説を支持したい。なぜならば、Mishnah, Yev. 4 : 7 に示されている如く、レヴィレート婚の義務を負わないハリツァーの場合に、父が生きておれば父が全てを相続するが、さもなければ、遺産は兄弟で分割されるのであるから、ましてや、兄弟の中でただ一人レヴィレート婚の義務を負う者に死亡した兄弟の遺産を承継させることは認められしかるべきだと考えるからである。

三、ハリツアーをめぐって

一

レヴィイレート婚の義務は亡夫の兄弟の義務であることが申命記二五章五節に明記されている⁽¹⁾。しかるに、この義務を兄弟が拒否し、忠実に履行しない場合に、その兄弟は死を以て罰せられたことは創世記のオナンの例からも明らかである⁽²⁾。

ところで、申命記法は、レヴィイレート婚の履行を奨励しつつも、どうしても一方の当事者がレヴィイレート婚を望まない場合、一定の手続きを経て、義兄弟にはレヴィイレート婚の義務を免除し、また未亡人には彼女の望む誰とでも再婚する自由を与えた⁽³⁾。この画期的な手続きはハリツアー [halitsah] と呼ばれる⁽⁴⁾。

のちのタルムードを見ていくと、レヴィイレート婚の本来の目的である「死亡した兄弟の名を再興する」ということよりも、他の動機から（例えば、彼女の美しさにひかれて、あるいは単に、性的な交わりを楽しむために）義兄弟が未亡人と結婚することを望んでいるかも知れない、と判断される場合⁽⁵⁾、あるいは当事者の年齢に大きな隔たりがあるとか、義兄弟が重態もしくは未亡人にふさわしくない等の場合には、レヴィイレート婚に反対し、むしろハリツアーを優先させようと努力する傾向が時代と共に強められていった⁽⁶⁾。

かくして、レヴィイレート婚という古代の制度は、ますます廃れていき、やがて、ハリツアーが一般的原則で、レヴィイレート婚は稀な例外である、と言われるようになった⁽⁷⁾。

もつとも、事実はどうであつても、なお理論的には、レヴィイレート婚を規定した申命記法は有効と推定され、ハリツアーに伴う儀式において、レヴィイレート婚を拒否することは、彼とその家族に不名誉をもたらすものと考えられた。

- (1) ところが、レヴィ・レイト婚という申命記二五・五以下の規定と並んで必ず言及される創世記三八章やルツ記の記事を見ていくと、結果的には亡夫の兄弟がその義務を果たしていないのである。この点について、本稿第二章第二節の注(8)を見よ。
- (2) 創世記三八・九〜一〇に「オナンはその子孫が自分のものとならないのを知っていたので、兄に子孫を与えないように、兄嫁のところに入る度に子種を地面に流した。彼のしたことは主の意に反することであつたので、彼もまた殺された。」と記されている。

余談になるが、onanismの語源は、この旧約聖書のオナンの故事に由来することは良く知られていることである。

もう一つ、創世記三八章の記事の中で注目しておくべきことは、ユダがタマルの不貞行為を知らされた時に、「あの女を引きずり出して、焼き殺してしまえ。」と言ったことである。周知のように、新約聖書においては、姦淫の女が捕らえられてイエスの前に連れて来られた時、人々はモーセの律法を根拠にして、この女を石で打ち殺すようにと迫つたのだつた(ヨハネによる福音書八・一二)。この時引き合いに出されたモーセの律法とは、レビ記二〇・一〇「人の妻と姦淫する者、すなわち隣人の妻と姦淫する者は姦淫した男も女も共に必ず死刑に処せられる。」と申命記二二・二〇〜二四「男が人妻と寝ているところを見つけれられたならば、女と寝た男もその女も共に殺して、イスラエルの中から悪を取り除かねばならない。ある男と婚約している処女の娘がいて、別の男が町で彼女と出会い、床を共にしたならば、その二人を町の門に引き出し、石で打ち殺さねばならない。その娘は町の中で助けを求めず、男は隣人の妻を辱めたからである。あなたはこうして、あなたの中から悪を取り除かねばならない。」であり、その根底にあつたのは、いわゆるモーセの十戒の「姦淫してはならない。」(出エジプト記二〇・一四、申命記五・一八)であつた。このように、姦淫＝不貞行為を行なつたならば、死刑に処せられるべきこと。その処刑方法は石打ちの刑であつたこと。これが一般的な処刑方法であつた。

しかし、特別な場合には、創世記にあるような焼き殺すことも行われた。すなわち、レビ記二〇・一四「一人の女とその母とを共にめとる者は、恥ずべきことをしたのであり、三者共に焼き殺される。あなたたちの中に恥ずべきことがあつてはならない。」やレビ記二二・九「祭司の娘が遊女となつて、身を汚すならば、彼女は父を汚す者であるから、彼女を焼き殺さねばならない。」がそれである。

石で打ち殺す刑と火で焼き殺す刑との差異は明らかでないが、火で焼き殺す刑はハンムラビ法典でも近親相姦の場合の処刑方法として規定されていることから（一五七条）、この方法は古代オリエントに起源を有すると考えられる。

- (3) 寡婦未亡人は誰とでも再婚できるといっても、聖書の記事から、祭司とは再婚できなかった。すなわち、レビ記二一・七「遊女となつて身を汚した女、あるいは離縁された女をめとつてはならない。祭司は神に属する聖なる者だからである。」や、レビ記二一・一三〜一四「祭司は処女をめとらねばならない。やもめ、離縁された女、遊女となつて身を汚した女などをめとつてはならない。一族から処女をめとらねばならない。」から明らかのように、祭司は未婚の女（処女）とのみ結婚することが要請された。

- (4) このハリツァーは「靴を」脱ぐとか「結び目をほどく」を意味するヘブライ語ハラツ「halats」に由来し、レヴィイレポート婚の当事者である義兄弟の足からそのはいてある靴を脱がせる儀式をいう。（Klein, E., *A Comprehensive Etymological Dictionary of the Hebrew Language for Readers of English*, Macmillan, 1987, p. 219.）

- (5) *The Jewish Encyclopedia*, Vol. VI, p. 171.

- (6) *Encyclopaedia Judaica*, Vol. 11, p. 125.; *Bablonia Talmud*, Yev. 39b.

- (7) *The Jewish Encyclopedia*, Vol. VI, p. 171. および *Encyclopaedia Judaica*, Vol. 11, p. 125.

二

もし、その人が義理の姉妹をめとろうとしない場合、彼女は町の門に行つて長老たちに訴えて、こう言うべきである。「わたしの義理の兄弟は、その兄弟の名をイスラエルの中に残すのを拒んで、わたしのために兄弟の義務を果たさうとしません。」町の長老たちは彼を呼び出して、説得しなければならない。もし彼が、「わたしは彼女をめとりたく

ない」と言い張るならば、義理の姉妹は、長老たちの前で彼に近づいて、彼の靴をその足から脱がせ、その顔に唾を吐き、彼に答えて、「自分の兄弟の家を興さない者はこのようにされる」と言うべきである。彼はイスラエルの間で、「靴を脱がされた者の家」と呼ばれるであろう。（申命記二五・七―一〇）

これが、ハリツァーについて聖書が伝えている規定である。要するに「町の門」^①のところが一種の法廷の場となっており、「長老たち」^②がその裁きに係わったというのである。ここでの長老たちの任務は、説得であり、調停の役割が与えられていただけで、いわゆる裁判の主宰者として判決を下す機能を帯びていたわけではなかった。^③

調停の場において長老たちが説得し諭した結果、当人が娶る決断をすることがあったかも知れない。しかし、それでもなお拒否する場合が生じた。かくして、万策尽きてレヴィレート婚の可能性が無くなったところでハリツァーの儀式が挙行されたのであった。

（１）「町の門」とは、城壁で囲まれた都市の出入り口として、重要な役割を持っていた。防御上の目的から、門の数は出来るだけ少なくされていた。門は櫓によって固められ、二枚の板の観音開きになった扉によって開閉された（士師記一六・三、イザヤ書四五・一）。開門は日の出、閉門は日没に行なわれた（ヨシュア記一・五、ネヘミヤ記七・三、同一三・一九）。門の櫓の上には守望者が立ち、そこには宿直の部屋が設けてあった（サムエル記下一八・三三「一九・一」）。古代には門の前の広場が市場となっていた。また門は、しばしば外門と内門との二重になっており、そのような場合には二つの門の中間の空所には、腰掛が置かれ、町の長老たちが裁判を行う場所になっていた（創世記二三・一〇、ルツ記四・一）。以上、『新聖書大辞典』一三八七頁参照。

(2)

「長老たち」(ゼクニーム [zequnim]) とは、「年寄り」を意味する語(ザケン [zagen]) に由来する語で、それはさらに「あご髭」の意のザカン [zaqan] から来ている (*Theological Dictionary of the Old Testament*, vol. IV, p. 122ff.)。特に古代イスラエルにおいては身分のある政治参与者に対する術語とされた。イスラエル人がなお部族制のもとにあった時、権力は家族、氏族、部族の長の掌中に握られ、「長」は一般に「老年」であったことから「長老」と呼ばれた。

原則的にはすべての家長が同時に権力を持つのであるが、実際にはより重要な家族の長たちが部族における権力を行使し、かくして「長老」という名称は、年齢よりも身分の高いことを意味するようになった。

イスラエルの「長老たち」(出エジプト記三・一六、民数記一一・一六、サムエル記上四・三)、また部族の「長老たち」(士師記一一・五、サムエル記上三〇・二六)は、民または部族における貴族階級を構成していた。戦時には、彼らは一族を率いて戦いに臨み、平時には、行政の任に当たった(出エジプト記一八・二三～二六)。しかし、彼らはその決定を執行する権力は許されておらず、彼らの権力はむしろ道徳的なものであった。

カナン占領後も(サムエル記上二〇・六)、さらに捕囚後までも(ネヘミヤ記四・七、同七・六四、ゼカリヤ書一二・一二～一四、cf. ローマ書一一・七)、血縁関係に基づく部族制が存在したけれども、日常の事件はイスラエル人が共同で住む場所の事情に従って処理された。そこから主要居住地である町の「長老たち」(ヨシヤ記九・一一、士師記八・一四、サムエル記上一・三、同一六・四、列王記上一・八、申命記一九・一二、同二一・三、二一・一九)は、イスラエル共同体の生活において重要な地位を占めるようになり、町の貴族階層が部族の貴族階層に取って代わった。王朝の制定と中央集権の傾向によって「長老」の権力は衰微するに至った。しかし王たちは常に「長老たち」の意見を考慮せざるを得なかった(サムエル記上三〇・二六、サムエル記下三・一七、同五・三、列王記上一二・六、同二〇・七～九、列王記下一〇・六、同二三・一)

長老たちは王の顧問でもあった(列王記上一二・六、同二〇・七～九)。ソロモンは町々に「代官」を置いて、徴税および行政の任に就かせたけれども(列王記上四・七～一九)、町の長老たちはなお従来の特権を保有していた(サムエル記上一・三、同一六・四、列王記上八・一、同二一・八～一四)。捕囚帰還後、ペルシアはユダヤ人にある程度の自治を許し、指導者

たちは「長老」として地方自治の権力を持った（エズラ記一〇・八、一四）。彼らは主として正しい行政の責任を持った（エズラ記五・九、六・七）。以上、『新聖書大辞典』九二六頁参照。

(3) 鈴木前掲書四二三頁。

三

ところで、ハリツアーの儀式そのものについては、申命記が次のように記している。

義理の姉妹は、長老たちの前で彼に近づいて、彼の靴をその足から脱がせ、その顔に唾を吐き、彼に答えて、「自分の兄弟の家を興さない者はこのようにされる」と言うべきである。（申命記二五・九）

ここに記されている如く、儀式自体はとても簡単である。しかしながら、聖書の規定を展開させたラビたちは、この儀式をより厳粛に、また、より一般的なものへと変化させた。

まず、長老たちについては、非常に学問があることは必要ではないが、⁽¹⁾少なくともヘブライ語を理解する者であること。⁽²⁾また、一般の法律問題について証言する資格のある者であること。⁽³⁾以上の要件を満たす者が三人から成る法廷[*bet din*]の前で儀式が行われること、⁽⁴⁾これらが求められた。

かつては町の門で行われていたハリツアーの儀式は、その後、寡婦となった義理の姉妹の家で行われてもよいとさ

れたが、通常はシナゴグもしくはラビの家において執行された。⁽⁵⁾

なお、ハリツァーの儀式は、安息日もしくは休日、また、それらの日の前日、および一般の日の夕方に実施されてはならないとされていた。⁽⁶⁾

さて、ハリツァーに定められた日、関係者は全員、所定の場所に赴き、長老役の三人と証人役の二人はベンチに腰掛け、当事者の二人は立って儀式の始まるのを待つ。この時、義兄弟はその右足にハリツァー用の特別の靴をはいていた。⁽⁷⁾

儀式の開始に先立って、当事者の関係が明らかにされ、また、両当事者が未成年でないこと、⁽⁸⁾彼女の夫の死後九一年以上経過したことが確認される必要があった。⁽⁹⁾

さて、寡婦は申命記の文言通りに朗唱していく。すなわち、「わたしの義理の兄弟は、その兄弟の名をイスラエルの中に残すのを拒んで、わたしのために兄弟の義務を果たそうとしません。」(申二五・七)これはすべてヘブライ語でなされる必要があった。寡婦がそのまま書面を読んでいく場合と、⁽¹⁰⁾三人の長老のうちの主任格の者が書面を朗読し、寡婦は一語一語それを繰り返す場合とがあった。⁽¹¹⁾

それから、義兄弟は同じようにヘブライ語で、「わたしは彼女をめとりたくない。」(申二五・八)という文言を唱え



18世紀初頭 オランダでのハリツァーの様子を伝える参考図
(Jüdisches Lexicon, Bd.3 より)

た。これは彼の拒絶を確認する返答であつたが、その方法についても、自ら言う場合と、後について繰り返す場合とがあつた。

この後、寡婦は左手で靴を支えながら右手でひもをほどいて、靴を脱がせていく⁽¹²⁾。そして、脱がせた靴を遠くへ放り投げる。それから、彼女は、義兄弟の前に向き直り、聖書（それにヨセフスや一部のラビ）によれば、「その顔に唾を吐き」（申二五・九）とあつて、その文言通りに履行されることを要求したけれども、他のほとんどのラビは、義兄弟の面前で、彼の顔にではなく、床の上に唾を吐くことで良しとしていた。つまり、長老たちは彼女が唾を吐くのを見るならば、それで十分であるとした⁽¹³⁾。

その後、「自分の兄弟の家を興さない者はこのようにされる。」（申二五・九）と言うが、これも彼女自身が言う場合と、司会をする長老役の判事の後について、この言葉を繰り返す場合とがあつた⁽¹⁴⁾。

さらに、「彼はイスラエルの間で『靴を脱がされた者の家』と呼ばれるであろう。」（申二五・一〇）と言うのであつたが、特に彼女は最後の「靴を脱がされた者」の「haluz ha-na'al」という章句を三度繰り返す。すると出席の会衆も彼女の後について三度それを唱和した⁽¹⁵⁾。

以上がハリツァーの儀式のごく大筋であり、レヴィレート婚を拒否した各当事者が自由になれるために必要な手続きであつた。

(1) *The Jewish Encyclopedia*, Vol. VI, p. 171.

(2) *Bablonia Talmud*, Yev. 101a. そこでは、長老たる者は、必ずしも専門の裁判官であることは要しないが、所定の文言「申

命記二五・七〇九」を裁判官のように指示出来る者であることが求められていた。

- (3) *The Jewish Encyclopedia*, Vol. VI, p. 171.
- (4) *Mishnah*, Yev. 12:1 なお、これらの三人は、彼らを補助するための他の二人を指名すべきであった。この二人は、ハリツァーの儀式の際に、証人として行動することになっていたという (*The Jewish Encyclopedia*, Vol. VI, p. 171.)。
- (5) *The Jewish Encyclopedia*, Vol. VI, p. 171.
- (6) *The Jewish Encyclopedia*, Vol. VI, p. 171. なお、*Bablonia Talmud*, Yev. 101a. ^{בבב} *Sanh. 34b* (*Mishnah*, *Sanh. 4:1*)の規定に従って、ハリツァーを、一般の訴訟と同様、これらの日時に実施することを禁じていた。ところが、*Mishnah*, Yev. 12:2によれば、かつては夜に行われたハリツァーも有効であったようだが、ラビ・エリエゼルによつて無効と宣言されたという。
- (7) *The Jewish Encyclopedia*, Vol. VI, p. 172. この靴について、ミシュナは詳細な規定を定めていた。すなわち、ハリツァーを靴[*min'al*]で行うなら有効だが、フェルトのソックス[*anplin*]なら無効。かかとの部分のあるサンダル[*sandal sheyesh-lo 'akev*]なら有効だが、かかとの部分のないサンダルは無効(以上、*Mishnah*, Yev. 12:1)。また、木製のサンダル[*sandal shel 'ets*]も有効。靴が義兄弟のものでなくても有効。なお、義兄弟には大きすぎる靴でも、彼がそれで歩けるなら、ハリツァーは有効。また逆に、小さすぎる靴でも、それで義兄弟の足の大部分をおおうことが出来ればハリツァーは有効としていた(以上、*Mishnah*, Yev. 12:2)。
- ところで、義兄弟はハリツァーの靴をふつう右足にはいていたとされるが、左足にはいていた場合には、有効とする(ラビ・エリエゼルの)説もあったが、後に彼の説は否定された (*Mishnah*, Yev. 12:2)。
- (8) 義兄弟が未成年[「二三才と一日未満の者」(*Philip Blackman*, op. cit. p. 91)]の場合、寡婦が成人であっても、彼女のハリツァーは無効。一方、未成年の寡婦がハリツァーを行ったならば、彼女が成人に達した時[「二三才と一日」(*Philip Blackman*, op. cit. p. 91)]、もう一度ハリツァーを行わなければならない。もし彼女が再度のハリツァーを行わないなら、彼女の最初のハリツァーは無効とされた (*Mishnah*, Yev. 12:4)。

- (9) これらの調査は前日までになされるべきであったという。*The Jewish Encyclopedia*, Vol. VI, p. 171.
- (10) これは *Encyclopaedia Judaica*, Vol. 11, p. 126. が伝えている方式である。
- (11) こちらは *The Jewish Encyclopedia*, Vol. VI, p. 174. が伝えている方式である。
- (12) 靴のひもについて、ひもがひざから下で結ばれているなら、ハリツアーは有効だが、ひざから上であれば無効であったという (*Mishnah*, Yev. 12:1)。
- (13) *Encyclopaedia Judaica*, Vol. 11, p. 126.
- (14) ところで、ハリツアーの儀式においては、①靴を脱がせること、②唾を吐くこと、③定められた式語を述べることで、必要十分条件であった。しかるに、①②は為されたが③が欠けている場合には、ハリツアーは有効であった。これに対して、②③は為されたが①を欠く場合には、無効とされた。他方、①③は為されたが②を欠く場合について、ラビ・エリエゼルによれば無効だが、ラビ・アキバは有効とした。前者は申二五・九を根拠に、そのすべてを行うことが必要条件であるとしたのに対して、後者も同じく申二五・九を根拠としながらも、儀式の有効性は、男に為される必要のある行為に依るとした (*Mishnah*, Yev. 12:3)。
- (15) *The Jewish Encyclopedia*, Vol. VI, p. 174.

四

ところで、従来、ハリツアーの意味については、レヴィレート婚を実施しないような義兄弟を軽蔑する為のものであり、そのことは、実際に行われたかどうかはともかく、「その顔に唾を吐き」という言葉に典型的に表われており、また、「靴を脱がされた者」を未亡人と出席の会衆とがそれぞれ三度も唱和するということにも、軽蔑の意味が込めら

れているものと考えられた説があつた。⁽¹⁾

また一方、ルツ記四章との関連で、ハリツァーの儀式での靴は権利譲渡の象徴であり、靴を脱ぐことは、義兄弟が未亡人との間にレヴィレート婚を実施することをあきらめ・放棄することを意味し、それゆえ、靴を脱ぐことそれ自体の行為には、何ら恥辱の意味を伴うものではなかつたという説もあつた。

ところが、最近、これらの諸説に加えて、ハリツァーの儀式の淵源とも言うべき「靴を脱がせる」ことには、全く別の意味が含まれている、という新説が発表されている。⁽²⁾

この最近の学説によれば、創世記三三章との関連から、靴は女性生殖器を、足は男性生殖器をそれぞれ象徴し、靴を脱がせるというのは、女性の側からのレヴィレート婚拒否の事実を象徴的に表していたというのである。

たしかに、この新説の方が、権利譲渡の象徴説よりも説得力があるように思われる。なぜならば、義兄弟が自ら靴を脱いで、それを寡婦に渡すというのなら、権利譲渡説も成り立つであろうが、ハリツァーの場合には、義兄弟は、まさしく受け身の立場で、靴を脱がされるだけであつて、むしろ寡婦が積極的に靴を脱がせ、唾を吐くのであるから、権利譲渡の象徴説は受け入れ難い。

むしろ義兄弟の足から寡婦が靴を脱がせるのは、オナンの故事にならつて、男性生殖器を女性生殖器から引き離すことを意味し、唾を吐くのは、精液を外に漏らすことを象徴しており、それゆえに、唾を吐くことにも軽蔑の意味はなかつた。

このように説いて、軽蔑説をも明快に退けている。⁽³⁾

- (1) 義兄弟はトローラーの謀反人とみなされ、無言の圧迫と、ほとんど侮辱のうちに追放されたという(Philip Blackman, op. cit. p. 93)。
- (2) C. M. CARMICHAEL, A Ceremonial Crux: Removing a man's sandal as a female gesture of contempt, in *JBL* 96 (1977), pp. 321-36. なお、同じ著者による '*Law and Narrative in the Bible* — The Evidence of the Deuteronomic Laws and the Decalogue, Cornell Univ. Press, 1985, の'とりわけ' p. 296f. 参照。
- (3) しかし、この新説についても、筆者は全面的に賛成しかねる。なぜなら、唾が精液を象徴するとしても、義兄弟が唾を吐くのなら、精液を外に漏らすことの意味はわかるが、なぜ寡婦が義兄弟に代わって精液を象徴する唾を吐くのか、その意味が理解できないからである。

四、結びに代えて

以上、兄弟がいて、そのうちの一人が子供もないうちに死亡したなら、彼の兄弟が寡婦を娶るというレヴィレート婚をするか、さもなければハリツァーの儀式をして、寡婦に再婚の自由を与えるという、聖書に見える興味深い特殊な慣行について、申命記二五章五―一〇節に規定されている記事を中心に考察してきた。

ところで、最近出版された柏井宣夫『旧約聖書における創造と救い』の第五章「日常生活の諸相」第二節に、「女性の土地所有」という興味深い論考がある。その中で、寡婦には相続権がなく、それゆえレヴィレート婚が行われることになったという、レヴィレート婚制度の根幹についての指摘があり、⁽¹⁾ともすれば「木を見て森を見ない」傾向に走りがちであった筆者にとつて、大局的に物事を見ていくことの必要性を再認識させて下さったことに対し、感謝したい。

ただ、レヴィレート婚は「長男」が生まれ、死んだ夫の相続権が確保されれば、目的を遂げ、その後の結婚は、マヌ法典との比較から、解消されたとみなされる、としている点については、十分な検討をすることができなかったのだ、結論を留保しておきたい。

また、著者が論考において、(1)通常は男性たる夫が土地の所有者であり、女性たる妻は夫の保護の下にあった。(2)夫の死後、男の子があれば、彼が遺産として土地を相続した。(3)男の子がない場合、ツエロフハドの娘の場合に見られる如く、極めて限定された場合にのみ、娘が土地を相続する場合もあった。(4)子がないまま夫が死んでも、妻は夫の土地を相続できなかった。この場合、「レビレート婚」と呼ばれる特別な結婚が待ち受けていた。その規定は申命記に残っているとして、ドライヴァーの説を要約しつつ、⁽²⁾申命記のレビレート婚の規定の特徴を次の三つにまと

めている。

①死者が男の子孫を残さなかった場合に限られる。

②夫の兄弟が同じ家庭のうちに住んでいる場合にだけ有効である。

③夫の兄弟はまだ自分の家族を持っていない。

しかしながら、①、②については、本稿第二章第二節で考察してきたように、レヴィレート婚は、男の子に限らず女の子を含めて子供が一人もいない場合に行われ、また必ずしも同じ家庭のうちに住んでいることを条件とはしていなかった。さらに③についても、本稿第二章第三節および本稿では言及しなかったが、ミシュナ第三章の多くの規定より明らかのように、夫の兄弟が独身であることを必ずしも要求していなかった。

以上のことから、柏井氏（ひいてはドライヴァー）の示す申命記におけるレヴィレート婚規定の特徴としての三点は、いずれも受け入れられないものである。

聖書とその周辺の「法的諸問題」を考察の対象として、ここ数年ささやかな研究活動が続けてきているものの^③、まだ手を染めて間もなく、ほんの緒に就いたばかりであり、筆者としては、いわゆる家族法の分野については未開拓なので、聖書・ユダヤ法における婚姻・相続等の全般的知識・理解の不足を痛感した。本稿で取り上げたレヴィレート婚並びにハリツァーの儀式をめぐる拙論を以て、今後この分野に分け入るスタートライン・手掛かりとし、本稿で深められなかった、土地所有、扶養、等の問題を含め、前述したように、婚姻、相続、それに離婚等の諸問題を少しずつ説明していきたいと考えている。

また、申命記のレヴィレート婚に関連して、しばしば言及される新約聖書の記事^④についても、本稿第二章第二節の

注(6)で若干触れたものの、詳しく考察する時間的余裕がまっただけだったので、これも他日の課題として残しておきたい。

- (1) 柏木『前掲書』一六八～一六九頁。
- (2) Driver, S. R., *Deuteronomy*, 3rd ed., in *The International Critical Commentary*, T & T Clark, 1901.
- (3) 拙稿「イエスの時代の『銀行』」『人文・社会科学論集』第一号(一九八七)所収。
「安息年の債務免除とプロスボル」『同』第二号(一九八八)所収。
- (4) マタイ二二・二三～二三、マルコ一・一八～二七、ルカ二〇・二七～四〇。

「なお本稿は、『古代イスラエルの家族法——レヴィレート婚をめぐる——』と題して、法制史学会近畿部会(一九八九年五月一五日)で報告し、その後構想を練り直してまとめたものです。」

(一九九〇年九月二一日受理)